

国際的スポーツイベントに関する報道と外国人イメージ

文教大学大学院情報学研究科 准教授 佐久間 勲†

Isao Sakuma†

あらまし 国際的スポーツイベントに関する報道が外国人イメージに及ぼす影響を扱った実証的研究を紹介する。そして、その変化のメカニズムについて解説する。

キーワード：国民イメージ、国民性ステレオタイプ、国際的スポーツイベント、メディア報道

1. はじめに

私たちが持つ外国人イメージには、さまざまな要因が影響している。その要因のひとつがメディアである。私たちは、ある国民に直接出会ったことがなくても、その国民に対して何らかのイメージを持っていることが多い。それは、テレビ、新聞、雑誌などのメディア報道を通して得た情報に基づき、イメージを形成しているからであろう。

ただしメディア報道と言っても、その内容は多種多様である。筆者はメディア報道のなかでも、オリンピック大会やワールドカップ・サッカー大会などの国際的スポーツイベントに関する報道が、外国人イメージに多大な影響を及ぼしていると考えている。その理由として、第一に、国際的スポーツイベントの開催期間中は短期間であるにもかかわらず、さまざまな外国人について大量の報道が集中的にされていること、第二に、国対抗のスポーツ大会という競争的な文脈におかれるために外国人カテゴリが顕現化しやすいこと、第三に、スポーツに関する報道は、政治や経済に関するものと比較して、多くの人たちが関心を持っているために、接触する頻度や時間が長いことが挙げられる。

それでは実際に、国際的スポーツイベントに関する報道は外国人イメージに影響するのであろうか。本稿ではまず、夏期オリンピック大会に関する研究に限定し、先行研究の成果を紹介したい。

2. オリンピック大会に関する報道が外国人イメージに及ぼす影響

高木・坂元¹⁾がソウル大会に関する研究を実施したことを契機に、バルセロナ大会²⁾、アトランタ大会³⁾、シドニー

大会⁴⁾、アテネ大会⁵⁾⁶⁾、北京大会⁷⁾、ロンドン大会⁸⁾でも、オリンピック大会に関する報道が外国人イメージに及ぼす影響についての研究が行われてきた。これらの研究に共通している点として、パネル調査を実施していることが挙げられる。パネル調査とは、同一調査対象者に一定の期間をおいて繰り返し同じ質問に回答してもらう方法である。オリンピック大会の研究では、同一対象者に、大会の開催前と開催後で、いくつかの外国人のイメージを回答してもらう。そして大会の前後で、それらの回答に変化が見られるかを検討している。

こうしたパネル調査を用いて検討した結果、先行研究では、いくつかの外国人イメージが変化していることが明らかにされている。そしてその多くは肯定的な方向への変化であった。たとえば、ソウル大会からシドニー大会までの4つの大会では、外国人イメージを測定する複数の尺度(質問項目)を「好意度」という1次元に集約した上で外国人イメージの変化を検討している。そしていくつかの外国人イメージが好意的な方向に変化していることを見出している。その一方で、少数の外国人イメージは非好意的な方向に変化していることも見出している。たとえば、ソウル大会では、韓国(人)およびカナダ(人)のイメージが非好意的な方向に変化している。

ギリシャ大会以降の研究では、外国人イメージを複数の次元からとらえて、その変化を検討している。取り上げた主な次元としては、好意や人柄に関連する「あたたかさ(好意度)」、頭の良さに関連する「知的能力」、そして運動神経や運動能力に関連する「身体能力」の3つである。あたたかさや知的能力の次元は、ステレオタイプの基本的な2次元として指摘されているものである⁹⁾。身体能力は、近年、スポーツの場面で人(選手)を表現するとき使用される言葉である¹⁰⁾。特にアフリカや南米の地域の国民に関して表現するとき使用され、それらの国民に関するステレオタイプであることが指摘されている¹¹⁾。こうした複数の次元を測定した結果、ある外国人のイメージが変化すると

2014年5月23日受付

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

isao@shonan.bunkyo.ac.jp

† Graduate School of Information and Communications,
Bunkyo University

1100 Namegaya, Chigasaki, Kanagawa 253-8550, Japan

いっても、複数の次元のうちのある次元でのみで変化していること、ひとつの次元では肯定的な方向、別の次元では否定的な方向に変化していることが見出されている。さらに複数の次元のうち、スポーツと関連が深い「身体能力」のイメージが肯定的な方向に変化していることが見出されている。

以上の先行研究の成果を簡単にまとめると、オリンピック大会を通して、いくつかの外国人イメージが肯定的に変化していること、少数の外国人イメージは否定的な方向に変化していることが明らかにされた。それではこうした変化が生じる原因として、どのようなメカニズムが想定されるだろうか。

3. 外国人イメージの変化のメカニズム

それぞれの先行研究のなかで、外国人イメージの変化のメカニズムについての考察がなされているが、ここではその代表的なものを取り上げて説明したい。

第一のメカニズムは、メディア報道の内容に応じた外国人イメージの変化である。大会期間中や、その前後に起きた出来事や事件に関するニュースの内容に応じて外国人イメージが変化するというメカニズムは至極当然のものである(たとえば、ソウル大会のカナダ人イメージ、アテネ大会のハンガリー人イメージ)。しかし、メディア報道の内容が事実と異なっていたり、偏りがあつたりする場合、誤った外国人イメージの形成や、既存の外国人ステレオタイプの強化につながる可能性もある。

第二のメカニズムは、単純接触効果(mere exposure effect)である。単純接触効果とは、ある刺激に繰り返し接触することで、その刺激に対する好意度が増加するという現象である¹²⁾。オリンピック大会で活躍している外国人は繰り返しテレビなどで報道される。そして視聴者は何度もその外国人に接触する。その結果、その外国人に対して好意を持つ(イメージが肯定的になる)。単純接触効果による説明は、多くの外国人イメージの変化を説明することができる。実際に、ある特定の外国人に関するメディア報道への接触が多くなるほど、その外国人に対する好意度が好意的な方向に変化する傾向が見られている³⁾。ただし、外国人イメージが否定的な方向に変化することもあり、こうした結果については単純接触効果では説明することができない。

第三のメカニズムは、自己防衛的反応である。具体的には自己に対して脅威をもたらす対象を否定的に評価し(悪感情を抱き)、自尊心を維持するというメカニズムである。たとえば、ある国家がオリンピック大会で優秀な成績を収める一方で、自国の成績が悪かったとする。このとき優秀な成績を収めた国家は、成績が悪かった国民の自尊心に脅威をもたらす存在となる。そこで優秀な成績を収めた国民に対して否定的に評価するという。ソウル大会における韓国に対するイメージが悪化したという結果¹⁾は、自己防衛的反応により説明可能であろう。

4. おわりに

最後に、これまでの研究の問題点を述べる。

第一に、外国人イメージの変化のメカニズムに関する問題である。それぞれの先行研究では、得られたひとつひとつの結果を個別に説明するメカニズムはいくつか指摘されているものの、すべての結果を統一的に説明できる仮説(モデル)の提案にはまだ至っていない。

第二に、国際的スポーツイベントの影響の特殊性に関する問題である。筆者は冒頭で、他の報道と比較をして、国際的スポーツイベントに関する報道の影響が非常に強力であると論じた。しかし他のメディア報道との比較をした研究については、ほとんど行われていない。

第三に、メディア報道内容の分析に関する問題である。先行研究では、外国人イメージの変化の要因のひとつにメディア報道の内容が指摘されているものの、その内容を直接検討した研究はほとんど行われていない。

今後はこれらの問題点を踏まえた上で、国際的スポーツイベントが外国人イメージに及ぼす影響について研究を継続していく必要があるだろう。

〔文 献〕

- 1) 高木栄作・坂元 章(1991). ソウルオリンピックによる外国イメージの変化—大学生のパネル調査— 社会心理学研究, **6**, 98-111.
- 2) Sakamoto, A., Murata, K., & Takaki, E. (1999). The Barcelona Olympics and the perception of foreign nations: A panel study of Japanese university students. *Journal of Sport Behavior*, **22**, 260-278.
- 3) 向田久美子・坂元 章・村田光二・高木栄作(2001). アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化 社会心理学研究, **16**, 159-169.
- 4) 向田久美子・坂元 章・高木栄作・村田光二(2007). オリンピック報道は外国人・日本人イメージにどのような影響を与えてきたか—シドニー・オリンピックを中心に 人間文化創成科学論叢, **10**, 297-307.
- 5) 高林久美子・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・樋口 収(2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(2)—学生調査の結果— 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 608-609.
- 6) 樋口 収・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・高林久美子(2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(3)—市民調査の結果— 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 610-611.
- 7) 佐久間 勲・ハッ橋武昭・李 岩梅(2010). 北京オリンピック大会と国民イメージ(1) 情報研究, **42**, 23-30.
- 8) 佐久間 勲・日吉昭彦(2013). ロンドン・オリンピック大会と国民イメージ 2013年度社会情報学会大会, 29-32.
- 9) Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed)stereotype competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.
- 10) 川島浩平(2009). 「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差を探る—概念規定と方法論を中心に— 武蔵大学人文学会論集, **40**, 1-29.
- 11) 森田浩之(2009). メディアスポーツ解体<見えない権力>をあぶり出す 日本放送出版協会
- 12) Zajonc, R. B. (1968). The attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monographs*, **9**, 1-27.

さくま いさお
佐久間 勲 2000年3月一橋大学大学院社会学
研究科博士課程単位取得退学。同年4月日本学術振興会
特別研究員(PD)。2001年4月東京成徳短期大学専任
講師。2003年10月文教大学情報学部専任講師。2007
年4月同准教授。専門は社会心理学、主にステレオタイプ
に関する実験研究、調査研究に従事。